

第三章 出逢いは唐突に

1.

ぐったりしたオレと妙に元気な双葉に乗せたバスは、何事もなく昼前のオタク街へ到着した。

万事これからだっというのに、オレはすでに憔悴しきっている。気分としては、自分の全裸写真の展覧会に出向くのと同じだ。昨日の晩は眠れなかった。色々な意味で。

『どしたの？ 着いたよ。早く行こ』

オレの肩を叩くと双葉はそう言い、それから自然にオレの手を取った。そして、どぎまぎする間もなくバスから降りると、オレの都合など一切関係なくすぐそのアーケード街へ歩みを向けた。

実のところ、「デート」のお願いをされた先週の日曜日からまるっと一週間、オレは時間を見てはくりかえし双葉に今日のための事前レクチャーを授けていたのだ。ちよつと変わった服装の人がいるかも知れないけど怖がらなくていいんだよ（たぶん）とか、貼られるポスターの中の女の子が取ってるポーズの意味は一切訊かないでとか、万一写真を撮られたりしたらすぐオレに言うようにとか、とにかく一生懸命話したのだが、危機意識の薄い双葉にはあまり通じている様子はなかった。自分の希少価値をよく分かっていないのだ。まあ、そこが希少価値なのだが。

さて、何がそんなに嬉しいのか今日もご機嫌の双葉は、ちよつとだけおめかしをしていた。ふわふわとひだのあるロングスカートに淡い色のブラウス、その上には秋らしい軽めのカーディガンを羽織っている。そんな女の子と手を繋いで一緒に歩いているのだ。向かう先が汚泥地帯でなかったらどんなに幸せだったろう。

オレはオレでいつもよりはマシな服を着ていこうと思ったのだが、あいにくオシャレしたくても素材がない。結局普段と変わらないフード付きパーカーにジーパンである。P Cチップの関係で服は必ず身分証明やら何やらが必要になるからとにかく面倒で、母親に適当に買ってくるように任せるところこういうことになるのだ。下手をすると姉貴が買ってきて、もっとひ

どいことになる。

……でもま、いいか。

秋空の下でもまるで春の日差しのように軽やかな微笑みを浮かべている双葉を横目に見ながらオレはだらしなくにやけ、そしてどこからか聞こえてきた「リアル百合っ娘じゃね？」という声の主を凶暴な顔で睨み付けた。しかし、そんなのんきなことを考えていられたのも最初のうちだけだった。

『ねえ愛くん、あれはなに？』

『え……と、飼い主が、猫と仲良くなるために装着する器具で……』

『何で家政婦さんがティッシュ配ってるんだろ』

『就職難だからね……』

『あの絵の女の子、どうしてスクール水着とセーラー服と一緒に着てるのかな？』

『スカートを忘れてきたんだよ……』

『あれって着せ替え人形？』

『それに類するものかな……』

『あの人同じCDいっぱい買ってるね』

『間違えちゃったんだよ、なにかを……』

『どうしてあの喫茶店窓が全部すりガラスなの？』

『みんなの夢を守るためさ……』

『あのお店いろんな服が売ってるね、セーラー服、バニーガール、ウエイトレス』

『ある意味同じ種類の服なんだけどね……』

『あれ？ 男の子と女の子が抱き合ってるのに「お兄ちゃん大好き」って』

『見ちゃいけない！』

あれだけ訊かないでって言ったのに。

好奇心旺盛な双葉の質問はとどまるところを知らない。たかだか六日間レクチャーしたくらいでこの先鋭的な文化を理解するのは、やはり無理があったのだ。見るもの全てが面白いらしい双葉はこうして間断入れずに尋ね続け、それに比例してオレの精神的疲労はどこまでも蓄積されていく。そうしてどんよりとしていたオレがふと気づくと、双葉が真ん丸な眼で

オレの顔を覗き込んでいた。

『……楽しくない？』

眉も下がって悲しげなその表情に焦ったオレは、大慌てでテンションを上げると首を振った。

『楽しい楽しい！ オレは楽しいよもちろん。オレよりもその、双葉の方はどうなのかなって思っただし。無理にオレに合わせようとしてるんじゃないか？』

『私はすっごく楽しいよ』

双葉は朝日のように美しい笑顔を浮かべた。オレみたいな外道にはまぶしすぎて直視できない。

『アニメがこんなにたくさんあるなんて知らなかった。ポスターとかの絵も綺麗だし、お店も楽しそうだし。ああやって売り物がいっぱい置いてあるお店って、わくわくするよね』

へえ。一般人でもそういうものかな。それとも双葉にそういう素質があるのだろうか。少なくともウソついてオレにおべっか使うような性格ではないから、これが本心なのだろう。双葉が満足しているならオレは構わない。

そうして数軒の店を案内するうち、あれやこれやとごまかすのに苦労しながらも、オレは次第に楽しみだしていた。何しろこれは人生初の「デート」なのだから。つつい気持ちは浮き足立つ。

しかし……平穏な喜びは往々にして長続きしないものである。

ゲーム専門店を美少女ゲーム売り場を巧みに避けつつウインドウショッピングしている時、オレはふと、オレたちを見つめる鋭い視線に気づいた。

ちらりと見やると、そこにいるのは先週の、あの硬派な不良だった。

オレは双葉に見られないよう、顔をしかめる。目立たないように店の隅の棚の陰に身を隠しながらも、ヤツは確かにオレの方を品定めするように、じっくり視線を送っていた。

やっぱり眼をつけられていたのか。最悪だ。よりによってこんな時に。双葉を巻き込むわけにはいかないし、カツアゲされるところなんてもう絶対見られたくない。

辺りを見回すが、セオリー通り頼れる人も頼りがいのある人もいない。

必要などきになると見当たらなくなるのが説明書、ポイントカード、そして児童保護員である。仕方がない。

『双葉、昼ご飯まだだよな。駅前に何か食べに行こ』

双葉を不安がらせないようそれだけ伝えると、双葉の手を引いてオレは店を出る。そのまま人通りの多い道を、足早に抜けた。

サングラス越しのその眼差しは、たちまち騒がしい人混みの中に消えた。

2.

双葉は今、オレの目の前でハンバーガーを頬張っている。少し不思議そうにしながらも、何も訊かないでいてくれた。

ここは駅舎内の店である。すぐ横の窓からは、放射線状に広がる商店街の全景が見えた。口の中のを飲み込んでハンバーガーを置くと、双葉は言った。

『この商店街、結構広いんだね』

『まあね。太い通りが三本あって、その間も細かい路地で繋がってる。小さいのを含めたら、あの手の店が何軒あるかはよく分からないよ』

『ここを抜けると何があるの？』

『商店街の向こう側？ オフィス街。もともとその辺の会社で使う電化製品やコンピュータ部品を売る店が集まった商店街だから。普通の企業ビルとか、あと市役所とか県庁とか、県の教育委員会の本部も確かあったはず』

そのせいで何かと締め付けが厳しいのだが。オレは何となしに、窓から下を見る。すると数台の青いミニパトが、オモチャのような速度で走っているのが確認できた。正午も過ぎて、そろそろ巡回のお時間なのだろう。

『で。これからどうする？ もう帰るか？』

オレがそう訊くと、不服そうに双葉は口を尖らせる。

『もう？ まだ三十分くらいしか見てないよ。もっとあっちこっち廻ろうよ……せっかくのデートなんだから』

初々しく言った双葉は、ニツと笑うとオレの眼を見た。オレは頭をかく。そうだ。デートだってことを忘れかけていた。中三までなら二人きりで遊

びに行くこともちよくちよくあったし、だから今も、ついつい緊張感をなくしてしまう。

でも「デート」と銘打って出かけるのはこれが初めてだ。うん。それだけで胸が高鳴る。口がにやける。だけど、やってることは普段と変わらな
い気がする。ん？ 何が違うんだコレ？

またどうでもいいことにオレが頭を悩ませていると、双葉がこう提案した。

『愛くんのお薦めのお店とかはないの？ いつも行くところとか』

3.

他に行くところもないので双葉の言う通り、行きつけの五階建て大型アニメショップに連れて行かざるを得なくなってしまった。内心忸怩たるものがある。双葉が偏見を持たないでいてくれるよう祈るばかりである。オタク文化にじやなく、オレに。

とは言うものの、店に入るやいなやオレもまた楽しい気分になりつつあった。双葉の質問に答えながら、いつも通りの物色を始める。一階から徐々に上へ向かって攻めていき、今オレたちがいるのは三階の書籍売り場、この店の中では一番一般向けのコーナーである。

双葉は、普段行く書店では片隅に追いやられているライトノベルが壁一面に並んでいるのを見て目を見開き、手にとっては眺めていた。極端な

ボイス・ラヴ
B L系じゃなければまあいいだろう。オレはオレで、マイナー雑誌の新しい萌え四コマ単行本を買おうか買うまいかという重要かつ幸福な悩みに頭を痛めていた。当たり外れが大きいからなあ。

そうして、のんびりとした時間は流れていた。これがデートと呼べるのかは疑問だったが、でも、心落ち着く時間だった。オレは双葉の姿を横目に見て、ふっと息を吐いた。

しかし、そのときだった。

「こら、待ちなさい！」

擦れた大声がフロアの向こう、奥の階段から響いてきて、オレはそちらに顔を向けた。

同時に慌ただしく階段を駆け下りる音も聞こえる。何か物が落ちる音、壁に人がぶつかる音。そしてそれらが、次第にこちらへ近付いてくる。騒がしさに周りの人々も怪訝な顔をする中、オレは階段口を注視していた。双葉は当然気づいていない。そうしてやがて階段口に、大きな影が躍り出た。

それは例の、大柄な不良だった。

息は乱れ、表情はさらに兇悪になっている。その悪魔のような服装が、連なった美少女ゲームのポスターの前で不釣り合いに浮かび上がっていた。手には何か、角張った物の入ったヴィニル袋を持っている。

何でコイツがこんなところにいるんだ……と困惑していると、サングラスの向こう側の目が、オレを捉えた。

そして次の瞬間。

奴は、こちらに向かつて走ってきた。

……ヤバイ。

オレは即座に駆け出すと、素早く双葉の手を取り、フロア反対側のエスカレーターへと急いだ。

突然のことに何が起きたか分からず混乱した様子の双葉だったが、振り返って追っ手の姿を見るや、すぐさま状況を飲み込んだらしく、全速力で走り出す。並んだ立ち読み客の間を何とかすり抜けた。ちよつと後ろを見ると、不良くんは憤る客たちをさらに弾き飛ばしながら、悪鬼のような剣幕で追ってきている。

美少女ポスターの張り巡らされた下りエスカレーターを、バタバタと走り下りる。一階に出るとそこは店頭の新作RPG特別フェアコーナー。群れ集うオレのお仲間がいる中を、外へ向けて強行突破した。みんなが背負ったリュックサックが邪魔くさい。しかし後ろからは、恐るべき勢いでヤツが来ている。

珍しく慌てた表情の双葉の手をしっかりと引きつつ、オレはゲームの宣伝用ポップを蹴り飛ばすと、キレル店員を無視して外へ飛び出した。

必死で逃げる。しかし奴も必死で追ってくる。何なんだよアイツ、と思

いながら、オレと双葉は裏路地へ駆け込んだ。路駐自転車を数台引つ繰り返したが、気にはいられない。ちらりと振り向けば、もうすぐそこまですは迫っている。オレたちはさらに速度を速めた。勘弁してくれ！

だが……オレはそこでふと、追ってくるヤツの後ろにも、さらに別の追っ手がいることに気づいた。不良の後ろでは、数人の白髪のジイさんが目を血走らせて走ってきている。

「こら！ その黒服のオマエ、止まりなさい！ 止まらんか！」

あれは……児童保護員？

恐らく間違いないだろう。珍しい男の保護員、ありや警察OBだ。途方もなく尊大で理解力ゼロ、オバサン以上に手に負えないとして怖れられている。年に似合わない俊足で腕振り回しながら追いかけてきていた。

すると……アイツはあのジイさんに追われているだけか？

けれどどこまで来たらもう止まるに止まらない。駆け抜ける美少女二人に動揺する同志たちへ心の中で詫言を入れつつ、オレと双葉は、商店街を行く当てもなく走り続けた。

次の大通りに出る。いつの間にもやら不良くんはオレらに追いつき、横並びになって一緒に走っていた。すぐ隣から、案外余裕のある声で話しかけてくる。

「どっか逃げ場ねえか？」

「ない！」

いっぱいいっぱいのおレは素っ気ない返事しかできないが、実際保護員は、端末から周辺のPCチップの位置情報を全て把握できるのだ。どこへ隠れたってやり過ぎすことは出来ない。

振り返ってみるとジイさんが五人に増殖していて驚愕した。応援を呼んだのだ。人生楽しいことなど何一つなかったよと言わんばかりの面構えをした屈強な老人軍団が、鼻息荒く追跡してくる。最悪だ。

「おい前！」

不良の声に向き直ると、その角から化粧の濃いオバサンがオレに向かっって飛びかかってくる場所だった。急いで身を引いて避けるが、前方にはどこから湧いてきたのか保護員たちがゾンビのように待ち構えている。グレネードランチャーをぶち込みたい。

裏小道に何とか逃げ込んだものの、オレも大分息が上がってきたし、双葉もつらそうにしている。もう限界だ。向こうからはきつとこれだけが定年後の道楽に違いない老人保護員ホモイシたちの怒鳴り声が響いてきている。不良氏だけは平気な顔をしているものの、よく考えるとここを抜けたところで次の大通りには間違いなく連絡を受けた他のゾンビたちがひしめいているに決まっているのだ。なのにこちらはナイフ一本持っていない。確実に突破不可につきこらで諦めるか。それとも、まだしも勝てそうな老人の方に立ち向かうか。

そもそも自分に逃げるいわれなどまったくないということも忘れていたオレが、捕まるのを覚悟で今にも立ち止まろうとした、まさにその瞬間だった。

「……こっちだ」

どこからか、ひどくクールな女の子の声が聞こえた。

4.

周りを見回す暇もなく、オレはすぐ脇の汚い廃ビルの入り口からにゅつと突き出した手に袖をがっしり掴まれる。

そのまま、いきなり薄暗い中へと引きずり込まれた。視界が暗転する。

「????」

パニくるオレに向かって、その娘はぼそりと言った。

「……二階に上がれ」

急なことに戸惑うオレ、手を繋いだまま一緒に飛び込んだ双葉、ついについてきた不良の三人は先の声に従い、この裏路地に面した胡散臭い湿ったビルの階段を急いで上がった。急に暗がりに入ったのでここが何なのかさっぱり分からないし、声の主が誰なのかも分からない。仕方ないので、黙って彼女の後に続いた。

その彼女は階段の先のボロい軋むドアを、ゆっくりと開いた。

「ああ瑞歩ちゃん、お友達は大丈夫だったかな？」

柔く囁れた老人の声に彼女は小さくうん、と応えた。

ようやく目が慣れてくる。明滅する蛍光灯に照らされた部屋、その中に

並ぶ棚の上には、何かの基盤やコンピュータ部品が雑然と置かれている。これは、ジャンク屋だろうか？ オレはこの方面には全然詳しくない。店主らしい老人は、奥の部屋へと引っ込んでいった。

そして彼女は、オレらの方を向いてやる気のない口調で言った。

「……この二階はP.C.システムの電波圏外になっている。しばらくいれば保護員ホゴインもお前たちを見失うだろう」

「……終夜よすがら？」

それは、同じクラスの終夜よすがら瑞歩みずほだった。

つい一昨日も学校で会ったばかりだ。メガネの向こうの冷たい眼差しに背中のナップサック、首に掛けたヘッドフォンはいつもと同じだが、もちろん今着ているのは制服ではない。

大胆な迷彩柄の長袖シャツの上にブラックの七分袖を合わせ、わずかにふくらんだ胸元にはケルティックな首飾りを下げている。下はチェーンの見えるたるんだズボン、いずれもオレでも分かる高級なものばかりだ。いささかボーイッシュではあるが……

えらく、おしゃれだった。

思わずジロジロ見てしまったオレの視線に気づいたか、終夜はふいと目を逸らしてしまった。

「……なあ椅子ねえか？ 疲れたわ」

つい先程までの恐ろしげな素振りはどこへやら、すっかりフランクな態度になった不良くんは、髪を掻き上げ首を手で扇ぎながら、グラサンを鼻の先まで降ろして暗い室内を見渡す。あらわになった彼の眼は彫りの深い顔立ちにそぐうシャープなものだったが、しかし人に背を向けた悪人のようではない。眼に宿る光は、どちらかといえば優しげである。

とりあえず、話をした方がよさそうだ。

5.

自分の家のように振る舞う終夜がどこからか出てきたパイプ椅子に、オレたち四人は向かい合って腰掛ける。まずは自己紹介をすることにした。オレは自分自身と、それから双葉のことを二人に紹介し、双葉が聾者で

あることを話した。それを聞くと、不良の彼はひどく衝撃を受けた様子でこう言った。

「お前……男だったのか……」

食いつくのはそこか。その話題を掘り下げられないよう、オレは続いて彼に名前を訊く。双葉には順次、簡単に通訳してやった。流暢に手話を話すオレの姿を、今度は逆に終夜が、物珍しげに眺めていた。

「名前。いやその、名前、は、言わなきゃダメか」

彼は口籠もる。そりゃそうだろう。

「……レイオウ」

妙に嫌がる彼は、やがてそう呟いた。一瞬意味が分からず聞き返すと、彼は不機嫌な顔で、

「友達にはそう呼ばせてんだよ。いいだろ何だって。レイオウって呼んでくれ」

と早々にこの話題を打ち切った。仕方がないので、オレは続けて尋ねる。「で。あの店で何やってたんだ？ まさかオレを尾行^つってきた……わけじゃないよな」

「それもある」

あっけなくそう言われてオレはびくりと身を震わせた。近年何度目かの貞操の危機を感じる。こんな奴では抵抗できない。しかしレイオウは、それだけじゃねえよ、とふて腐れた口調で付け加えた。怯えながら、オレはさらに問う。

「でも……保護員^{ホゴイン}があんな必死こいて追いかけてくるなんて、万引き……じゃあないよね、君が欲しいものもあんな店にはないだろうし。やっぱその、カツアゲ、とかしてたの？」

「はア？」

レイオウは怪訝な表情を浮かべるとサングラスを外し、ジャケットの胸ポケットに掛けた。オレをじろりと睨^ねめ付けてくる。

不良耐性のないオレにはその一つ一つが怖い。

「買い物してただけだよ。ちゃんと金払って買ってる」

「いや、だ、だってそれだけであんなことになるわけないじゃん。だ、第一、君みたいな人が何買うの？」

「何って……」

レイオウは、走る間もずっと手放さなかったヴィニル袋の中をガサガサやると、おもむろに何かを取り出した。双葉も終夜も覗き込む。

大きさから言ってパソコンソフトか、独特の色調のパッケージイラストには変にハイテンションなタイトルロゴにスクール水着姿の小柄でスタイル抜群のおにゃのこがいつぱい、隅には斜線の入った赤い®マーク、これは、これはまさしく、

「もういい！ もういいです！」

「んだよ。裏面もちゃんと確かめねえと。購入時の決め手になる」

「勘弁してください！」

女子二人とこんなものを鑑賞できるほどオレは人間が出来ていない。それに終夜はともかく、純真な双葉には見せたくない。無理矢理袋の中へ戻させるとやっとオレは胸を撫で下ろし、それからレイオウを指弾した。

「何買ってたんだよ！」

「青春の清涼剤だ」

涼しい貌かほでレイオウは言ってはばからない。双葉は何なのかよく分かっていない様子で首を傾げていたが、終夜は了解したようで、でもいつもと変わらず冷めた表情のままだった。

「あのクソジジイ、売り場に入らずに入ってきて馬鹿でかい声でふしだらだの情けないだの世も末だのくっだらねえこと喚き散らしやがって。てめえが読めるスポーツ新聞の方がよっぽどだろっつーの。んで俺が未成年だって気づいたら没収しようとしてきやがる……マジうぜ」

どうコメントしたものが分からず、オレはぼやぼやと呟いた。

「いや、あの、うん、意外、というか、君みたいな人でも、その、そういうの、買うんだね……というか、二次でも、いいんだ……」

「お前俺のこと何だと思ってたんだ？ 何だよ君みたいな人って。おい」

眉間に皺を寄せてレイオウはオレに近づいてくる。ただならぬ迫力だ。それに低音でそのセリフはない。体育館裏に呼び出されるのに匹敵するくらいくらいの強烈な緊張感と吐き気を感じる。

ギリギリまで顔を寄せた末、レイオウはこう凄んだ。

「二次じゃねえと無理だろが」

「……え？」

今度はオレが訊き返す番だった。眼が点になる。

コイツ今何て言った？ 二次希望？ しかもダメ、じゃなくて無理？

「三次の女なんか絶対にありえねえ。グロいだけだ。断固拒否だな。耐えられねえ」

唾でも吐きそうな険悪な面持ちで目を眇めると、レイオウは続けてはつきりと、そしてどこか誇らしげに、こう宣った。

「俺は二次の住人だ」

まさかの廃人宣言にオレ、騒然といった状態で、頭の中はパニックだった。脳が言語を処理してくれない。目の前の現実を認識できない。どっかで声優が吹き替えてるんじゃないかと思いたくなる。いや、そうであって欲しい。

袋を手にとると、レイオウ氏はなおもこうおっしゃった。

「このメーカー、シナリオ下らねーけど抱えてる絵師がいいからよ、とりあえず出る度に押さえてんだけど、今度のはどうだろうな。今時スク水もねえだろって気もする。お前どう思う？」

オレは目を瞑ってイヤイヤをした。答えたくない。出来れば耳も押さえたい。ハードロックの貴公子のような硬派な身なりの男の口から、絵師とかスク水とか聞きたくない。

「へえお前はアリか。割とベタな趣味してんな。じゃあアレか、今期のゴールデンでやってるアニメなんか大体ツボだろ」

「ゴールデンタイム？ 六時台になんかやってたっけ？」

「ああ？ お前何ほざいてんだよコラ！」

レイオウは信念の目付きと熱の籠もった調子で断言した。

「ゴールデンついたら深夜二十五時以降に決まってるんだろ！」

えー……

力強さだけなら「俺の女に手を出したら殺すぞ」と言う時と同じだが、内容は相当残念なことになっている。同意しないことはないが、大声で主張することでもない。

オレは急速に身体が萎えていくのを感じた。こんななりしてコイツ……オレ以上の硬派オタク？

「大体オタでもねえのにこの商店街来るわけねえだろが」

そう言つて鼻で笑うレイオウ。終夜は動じた様子もなく座ったまま、取り出したモバイルに黙々と何か打ち込んでいる。対面に座る双葉にこの悲しい事実を伝えなければならぬが、どう訳したらいいものか分からない。手話を話そうとしてもやるせない気持ちで腕が上がらない。

すると、それに気づいて終夜が囁くように言った。

「御子^{みこもと}元さんのために発言は全部打ちだしている。気にせず話を続ける」
そのリアルタイム字幕をずっと見ていたらしい双葉も、満面の笑顔でオレに言った。

『お友達出来てよかったね』

よくない。こんな奴に怯えて一週間ここに来られなかったオレの気持ちはどうなる。

「……んじゃあ、先週オレをストーキングしてたのは何だったんだよ！」

ああ気づいてたのか、とレイオウはざらりと行って、それからもつと怖い告白を重ねた。

「まあ、もつと前から眼はつけてたがな」

「何なんだよ！ 女だと思つてたにしたらって、三次には興味ないんじゃないのか！」

「手え出そうとしてたわけじゃねえよ。ただ……シルヴィア様に似てると思つて見てただけだ」

「はあ？……シルヴィアって、『れつつ☆おーくしよん！』の？」

今週いっぱい掛けて読み終えたライトノベルの内容を思い出す。シルヴィア・レオンハルト・ヴィシネフスカヤたん。『れつつ』のヒロインである英露ハーフのハードツンデレゴスロリお嬢様だ。執事の主人公をドSにこき使いながらも時折見せる弱い一面で男子のハートを驚づかみ、というヤツだが、それがオレに似ている？

「頭をロングウェーヴの銀髪にして眼を緑にしたらそっくりだ」

それ全然違うじゃないか。

「どっちも貧乳だしな。あと、お前もツンデレだろ？」

「違う！ ツンデレなんかじゃない！」

即座に否定したが、レイオウはそれを聞いてニヤける。ああそうか。否

定すればするほど深みにはまっていくスパイラルパターンだ。
「まあとにかく、コスプレさせたら似合うだろうなと思って眺めてただけだ。他意はねえよ」

それぐらいなら他意があつてほしかった。よろしくな、と言ってニカツと笑うレイオウと、オレはぐでんぐでんの脱力握手を交わした。

続いて終夜が名乗り、それからオレと同級生であることを言葉少なに語った。打ち出されたその文字群を読んだ双葉は、慣れた手つきで終夜のモバイルに、こんな疑問を書いた。

『ビルの中にいたのに、どうして私たちが追いかけてるって分かったの？』

「……このモバイルから近辺のPCシステムのホストに侵入できる。そこから端末用の画面を見て、保護員が大挙してPCチップ付きの服を着た三人を追いかけていることが分かった」

「そんな簡単にハックできるもんか？」

レイオウが訊くと、至極つまらなそうに終夜は応答する。

「企業サイトなんかと比べればかなりガードは甘い」

「まあ、んなデータ入手したって面白くもねえからな」

『でも、それだと追いかけてるのが誰かは分からないでしょう？』

双葉の書いたとおり、保護員端末には周辺にあるチップの位置情報は表示されても、わざわざ呼び出さない限り児童個人のデータは重すぎて出ないはずだ。終夜はそれに、簡素に答えた。

「……元々たまさか、カミシナの個人データと位置情報にアクセスしていた」

呼び捨てかよ。それはいいとして、オレのデータを見ていた？

「なんで？」

オレは訊いたが、それに対して終夜はむっつりした顔をオレに向けるばかりで、応えてくれなかった。よく分からん。何にせよ、オレが思っていた以上に終夜はコンピュータに詳しいようだった。服の趣味といい、意外な一面ばかりが明らかになる。

「終夜、この店の常連なのか？」

と訊くと、彼女はこくりと頷いた。マニアックなジャンクショップに入

り浸るとはまたレヴェルが高い。ふと見れば、部屋の隅にもたせかけるようにして、商店街中の電器店の紙袋が大量に山積みになっていた。

「あれって、全部終夜が買ったパーツ？」
また首肯。

「でもあれ持ち帰るの大変じゃないか？ どこに住んでるのか知らないけど」

「……タクシーを呼ぶから平気だ。勝手に心配するな」

当然のように言われて、オレはへえ、と思った。ひよっとしてお嬢様か何かなのだろうか。一方でさっきからモバイルで何かにアクセスして調べていた終夜は、最後に顔を上げた。

「お前たちを追いかけていた保護員はおおむね散っていった。この近くはもうほぼいよいよだ。帰りたければもう帰れるが、どうする？」

「俺はもうしばらくここに居るわ」

レイオウは苦々しい口振りで言った。

「あの手のジジイはしつこいからな。根に持ってどっかで見張ってるかもしれねえし。確実にいなくなるまで待ってから帰る」

こいつも確保できたしな、と袋を持ち上げて不敵に笑んだ。見ているオレはなんか虚しい。

「じゃあオレは……」

どうしたもんかと思つて双葉を見る。オレとしては本来追われる身でもないわけだし、別に帰つても構わなかった。だから双葉が望むならもうちよつと街を案内してもいいのだが、でもあのザコゾンビ保護員たちがオレらの顔を憶えていたら面倒な気もする。

すると、双葉は眼をぱちくりさせて考えていた。その挙げ句、

『しばらくここで、二人とお話しするんじゃないやダメ？』

と訊いてきた。うーん、と少し迷ったが、ダメと言う理由も特にない。

こうして、この妙なメンバーで、他に客のいない散らかったジャンク屋の二階などという妙な場所を占領しながら、何となく雑談をすることになった。

6.

とはいうものの、実際にはオレとレイオウ、双葉と終夜という二人ずつ男女の組になって喋り合っていた。とりあえずオレは、気になっていたことを尋ねる。

「レイオウって、いくつ？」

「十七」

オレより三つ上だが、敬語を使う気には到底なれない。さらに問う。

「やっぱ普通に不良友達っていうか、そっち系の仲間もいるの？」

「ああ。普段はそういう奴らと連つらんでる。夜はな。ファッションとかバイクとか好きだし。でも俺の趣味の話は誰にも話せねえ」

当たり前だ。オレですら話す相手がないのだ。

「……痛イタシヤ車とか乗れば？」

「ありや結構金かかるんだよ。その割に得られるものが少ない」

失うものしかないと思う。というか金があったらやるのか。

「あっちに手出すのは正攻法でやりつくした連中だろ。俺はそれぐらいだったらDVDやゲームに注ぎ込む。今やってるヤツだと……いいのはゼロミコぐらいじゃね？」

そう言われて、ついオレも身を乗り出してしまった。あんな陰惨なアニメの話題、ネットでも乗ってくれる奴はなかない。

「そうそう！ 今のとこまだ作画も崩れてないし、声優もはまってるし、話も面白いよな。ここ最近の中だと一番だと思うんだ。やっぱ脚本っていうか、ストーリーって大事だなんて思ってた……」

自分にしては珍しく調子に乗って熱く語っていると、少しレイオウが身を引いていることに気づいた。褒めてもらって喜びすぎたか、と思い、急に恥ずかしくなる。不慣れなことをするもんじゃやない。オレはうつむいた。

しかし、彼が言ったのは違うことだった。

「……愛、お前、すげえ眼を見て話すよな」

「え？」

しまった、またやった。手話を話すときの癖で、いつも相手の方をまっすぐ見据えてしまうのだ。そのせいでちよくちよく変な具合に勘違いされる。それも主に男子に。

「うあ、いや、これはその……」

「……うん、ま、いいけどよ。ゼロミコな。うん。俺もいいと思うけども、でもなあ……」

「え、何？」

「原作がアレだから仕方ねえけど、ちよつと描写キツくねえか？ スプラッタ系」

そう冷静に返されると、オレとしても何も言い返せない。

現時点ではあのアニメ、ほぼ完璧に原作ゲームの内容をなぞっていた。主人公の友達の子が同級生の女の子のロッカーに詰め込まれているシーンから先週は始まり、それを見てしまった女の子は精神に異常を来し、田舎の中学校が地獄絵図の様相を呈する中、さらに二人の女子生徒が混乱のうちにお互いの頭を鈍でかち割るという眼を覆いたくなるような凄惨な場面が終わった。続きは今日の深夜だ。

手に汗握る展開には間違いないが、社会常識というヤツに照らせば明らかにやりすぎだった。

「いや、俺だつてつまんねえこと言いたいわけじゃねえよ。よい子のための良識べつたりアニメなんか、いくらあったって面白くもなんともねえからな。ゼロミコ抜群にいいと思う。よくやつてる。もっとやれって思うよ。ただな……」

「うん……」

レイオウの言いたいことはよく分かる。教育省キョウイクショウや全P連が、動き出しかねないのである。

「少年犯罪が起こるとすぐアニメとゲームのせいにするだろ？ そのせいで最近は何悪な少年犯罪が増える、とかこないだも教育大臣キョウイク大臣がぼざいてやがった。救いよしのねえバカだな。昔つから、いい加減なスケープゴート作ってそれに責任押しつけときゃいいと思ってんだ。あいつが生まれるずっと前から少年犯罪の発生率なんか下がりに続けてるつうのによ。あのハゲ統計資料もろくに読めねえんだよ……ただ、その頭の悪いハゲが叫んだことが、この国では実現する。正義になる。道徳になる。で、そう言ったら楽しくねえのは、オレたちだ」

彼の言うとおりだ。確か二、三年前にも、性犯罪関係でそういう騒ぎが

あつた。

「あの事件のせいで大手の少年誌にグラビア載らなくなったし、マンガからもパンチラとかエロ描写一切なくなっただろ？ 教育省キョウイクシヨウの連中は規制しときゃ済むって盲信してっからな、このままゼロミコやりすぎると、何かあるんじゃないかと思っつてな。最近PC法強化とかいろいろややこしいし」

それだけが心配だな、とレイオウは結んだ。

オレはまた、何となく下を向く。なんだか「何も考えずに面白いんだからいいんじゃないか、教育省キョウイクシヨウなんか無視して自由に思うように作ればいいんだ」とか思っていた自分が恥ずかしくなったのだ。

そんなオレの様子をしばらく目を細めて眺めていたレイオウだったが、やがて吹き出すとこう言った。

「お前……カワイイな」

「ええッ？」

やっぱりそうなのか、狙われているのか、と思っつて顔が引きつったが、違う違うとレイオウは手を振る。そしてコキコキ首を鳴らしながら、一応フオロウしてくれた。

「お前みたいな見方みかたでいいんだって。面白けりゃいいんだよ。ゴチャゴチャ下らねえこと気にせず楽しんできゃいいの。俺がつまんねえ人間だっただけだ。気にするべきなのは製作サイドだが……ま、向こうだっつてバカじゃねえんだから。その辺はわかまえてるだろ。たぶん」

それから、彼は肩を揺らしてクツクと鳩のように笑い出した。

「？ どしたの？」

「いや……こんなマジでオタ話出来るヤツ初めてだから」

ああ。確かにそれはオレもそうだ。身近にこんな話が出るヤツなんて、今までいなかった。しかし、改めてそう言われてみると気恥ずかしい。なんだか、ほっこりした気分になる。

照れたオレは顔をそらすと、双葉と終夜の様子を見てみた。いくら双葉が人見知りしない性質たちとはいえ、未知数の終夜に対応しきれているか不安だったのだ。

ところが……ケモノの見合いのようになっていのではないかというオ

レの危惧をよそに、二人はずいぶんうち解けた様子でモバイル経由で喋りあっていた。対面チャットだ。うち解けたと言っても終夜のことだから、能面のような表情に変わりはないが、しかしどこことなく、眼差しが和らいでいる気がする。双葉に至っては、終夜が書き込む度に大喜びで笑っていた。一体何の話をしてるんだ？ もちろんこちらから、その内容はまったく窺えない。

その時、二人はオレの視線に気づいたのか、顔を上げた。目が合う。するとすぐに、終夜が手早く何事かを打ち込む。

それを見るなり双葉は破顔し、春のように爽やかに全身で笑っていた。目を凝らせば終夜も、口元がほんの少しだけ上がっているようだ。恐ろしくクールなのに変わりはないが、笑っている。

何だ？ 何の話だ？

「女子の内輪話は永遠の謎だ」

悟りの境地でレイオウはそう呟いた。うん。まったくその通り。

7.

その後もオレたちは他愛もない話で妙に盛り上がり、気づけばもう日が陰りだす時刻になっていて驚いた。

レイオウと終夜はもうしばらく商店街で宝探しをしていくと言うので、オレと双葉は一足先に帰ることにした。二人と電番・メアドを交換し、そしてオレたちはビルから出る。振り返ると、腰に手を置いてワイルドに笑うレイオウと、なんでもか少し首を傾げた終夜が見送ってくれていた。双葉は、小さな子どものようにいつまでも手を振っていた。

何がきっかけで知り合ったんだっか、なんだかもう、分からなくなっていた。

……まあ、いいか。

足どりも軽く満足そうな双葉と一緒に、オレはバスターミナルへと歩いた。あのジイさん保護員たちはストレス発散してもう帰ったようで、こちら見受けられるのはオバサンばかりだった。オレとしても今日は何を買ったわけでもないから、見咎められる心配はない。

何を買ったわけでもないのに、なかなか充実した気分だった。

そうして駅前に着く。二人で並んでバスが来るのを待っていると、突然耳障りな大声が頭に降ってきた。顔をしかめて見上げてみれば、駅前にどでかく設えられた街頭モニタに黒スーツ姿のハゲ、じゃなくて教育大臣キョウイクダイジンが大映しおおうつになっていた。政府広報番組のようだ。

「国民の皆さん！ 本日は、近々施行される改正児童福祉保護管理法の内容について、ワタクシから直じかにご説明させていただきます！ まず新法の規定によりまして、未成年児童の公共交通機関への無許可乗車が一切不可能となります！ お子様方の衣類のPCチップに保護者の方が許可する移動範囲の情報を入力していただきますと、それを越えた時点で警告音と共に駅や空港職員、近辺を巡回中の児童保護員へ即座に連絡が廻り、お子様方を保護することが出来ます。これによりお子様方が無断で危険な長距離移動を行うことを完全に抑止することが、可能となるわけです。これも、子どもたちのため、でございます！ 第二に、お子様方の眼の触れる範囲に性的な描写を含む物品を発見した場合、今後は警察官並びに児童保護員以外でも、すなわち一般の国民の皆様方であっても、店の側へ指導を行うことが可能となります！ この権限は、公的な指導によるものと同等と見なされます。皆様方の良識に従い自由に、そうした恥じるべき破廉恥な品を見つければ、処分させることが出来るのです。店がご指導に従わない場合は遠慮なく担当部署へご連絡いただければ、これまで以上に迅速な態勢により、直ちに営業停止を含む極めて厳しい行政処分を下すことが出来ます。またこれは性的なものに限らず、保護者の方から見て子どもに見せるに相応ふさわしくないと考えられるものすべてに関して、適用することが可能です。子どもたちの眼がそのような下品で低俗なものに汚されないよう、国民の皆様方とも一丸となって立ち向かっていきたい所存でございます！

そして今回の目玉でもあります児童親交関」

バスが来たので、オレたちはバスに乗った。

8.

双葉を家へ送り、母親の説教を生返事でスルーし、遅い夕食を食べたら、残るお楽しみはレイオウ曰くゴールデンタイムのアニメ、ゼロミコである。レイオウの言葉が若干気がかりではあったが、何だかんだ言ってもやっぱりわくわくしてしまう。

そして、感想。

今週は内容自体はそれほど過激ではなかった。誰も死ななかつたし誰も殺さなかつたし誰もバラバラにならなかつた。はつきり言えば地味だつた。もっと積極的に言えば、

鬱だつた。

鬱々とした主人公の腐った水槽の中身のような内面描写が延々三十分間どろりどろりと続いて、見ているこっちもどうにかなりそうだつた。でも……しかし……だが……とはいえ……と逆態接続語のオンパレード、結局何が言いたかつたかは分からずじまいだし。

何が腹立つつて肝心のヤンデレヒロインが全然出てこなくてその最頂ひいぎの声優のセリフも回想シーンの「そうです」オンリーだつたのだからもうありえない。後は本当に全部、深層心理に突き刺さるような厭らしい演出と主人公の陰鬱な独白のみだつた。

……ううん。

レイオウの言っていた意味ではヤバくなかつたが……これはこれで問題視される気がする。自分の中の暗い部分を掘り起こされるような感覚。たぶんそれで、狙い通りなのだろうけれど。

ネットを見ると、意外なほどに賛成票が多かつた。けれど、その賛成票の中には見るからにアブない文章というか、壊れ気味の言葉が書き連ねられているものもあつて……

……ううん。

分からなくなつた。ああいうものを野放しにしてよいものなのか、分らない。

見ているオレたち子どもへ、善し悪しを越えて得体の知れない強烈な影響を与えているのは間違いない。ネットの書き込みを見る限り、その影響はいささか大きすぎるほどだ。中高生は実際元からある程度不安定なわけ

だし、そんな時期にああいう作品にのめり込むと、確かに後々マズいことも起きてくるかも知れない（オレもだけど）。それが将来「何か」の原因になる、かも知れない。起きてしまっただけでは手遅れだ。「子どものために」なんとかするべき、なのだろう。

……けれど。

そうは思うが、そこから先は、上手く言葉が続かなかった。

ただ、素直に肯うべないたくなかっただけだ。

……あーあ。また下らない悩みだ。中坊全開。自分の中の醒めた部分がせせら笑っているのを感じる。なに一所懸命考えてんだか。ベッドに入り、オレは首を振る。虚しい。バカらしい。

そうは思っても、オレはなかなか寝付けなかった。

そのとき突然、ヴくと机の上の携帯が震えた。

【メッセージ受信・終夜瑞歩】

真っ暗な室内でぼくと光る液晶に表示される文字を見て、オレはポカンとした。何だ？ 今、夜中の三時過ぎだぞ？ こんな時間まで何やってんだ？ オレもだけど。

訝いぶかかしみつつ、オレはメールを開く。

【明日、昼休み、体育館裏に來い。話がある。】
……え？

何だこの文面。シメられるのか？ 今日のオレの発言に何か不適切な部分があったらどうか。

いろいろ思いを巡らしてはみるが、今まで通り終夜が何を考えているのかはさっぱり想像もつかない。早々に諦めてまたベッドに横になった。もう遅い。とつとと寝よう。

その結果、浅い眠りの中オレは、鉈を手にした終夜に体育館裏で追い回される悪夢に、一晚中うなされ続けたのだった。

「倫。入るぞ」

ノックの音と共に、父親が倫の部屋へと入ってきた。勉強机に向かった倫は、振り向こうともしない。

もうかれこれ一週間近く、両親とはろくに口を利いていなかった。先週の月曜日、道徳キャンプ送りにされた同級生のことで、口論になったせいである。

「倫」

父親は再び呼びかけるが、倫は決して応じようとはしなかった。自分は間違っていない。八木沼くんのためにも、負けるわけにはいかない。倫はそう、心の底から信じていた。正義は守られなければならない。

すると父親は、しみじみとした調子で言った。

「……お前には、負けたよ」

驚いた倫が顔を上げると、父は苦笑の中にもどこか喜びの入り交じった表情を浮かべていた。

「実は先週お前に言われてから、お父さんもいろいろ思うところがあったな。キャンプの指導官に、少しでも彼が早く出られるようはっぱをかけていたんだ。今日連絡があった。来週中には、彼は戻ってこられるそうだ」

それを聞いて倫は、喜びのあまり父親に抱き付いた。

「お父さん、ありがとう！」

父親はそんな倫の頭を、優しくゆっくりと撫でた。

「お前は昔から、自分が正しいと信じたことは、決して曲げようとしなかったな。頑固で、剛情で……でも、お父さんは、お前がそんないい子に育つてくれて、嬉しいよ」

「ありがとうお父さん、大好きよ……心配掛けて、ごめんなさい」

父娘は抱き合ったまま、いつまでも、離れようとしなかった。

その夜、ベッドの中で倫は思った。

よかった。本当によかった。あたしが八木沼くんを救うことが出来た。クラスメートのために役に立つことが出来て本当に、幸せだ。確かに教育委員会の人たちも、八木沼くんのことを思っていたことなのだと思う。で

も、大人の都合だけで全部を決めるなんてかわいそうだわ。わがままを言ってお父さんやお母さんを苦しめてしまったのは悲しいけれど、でも今日許してくれた。これで全部丸く収まった。よかった。

これから自分がするべきこと、それは、終夜瑞歩ちゃんをクラスの仲間に入れてあげることだ。今の瑞歩ちゃんは、完全に孤立している。友達が一人もいないのだ。絶対によくない。せつかく一緒のクラスになつたんだから、みんな仲良く中学生生活を送ることが出来るようにしないと。そのためにまず、あたしに出来ることをしよう。とりあえず、一生懸命瑞歩ちゃんに話しかけて、あたしが最初のお友達になれるようにしよう。

そんなことを思いながら、倫は暖かな眠りについた。